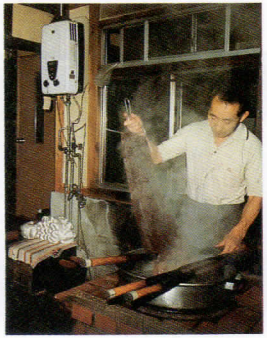
西陣明治の群像⑮

化学染料の父　中村喜一郎



西陣織にとって糸染もまた重要な工程である。織物となったときの色あいが、そこで決まってしまうからである。

古来から染料としては、木根草皮が使用されてきたが、諸外国の織物と較べると色艶が劣り、そのため明治になると、化学染料が輸入され使用されるようになった。価格も低く急速に浸透したが、輸入当初機業家は十分な化学知識もないままに使用されたため、〝舎密染〟〝粉染〟と揶揄される祖悪品が横行した。

そこで京都府は洋式染法を正しく教育するために、明治八年十一月、舎密局に染殿を設置した。そのとき教授として招かれたのが、農商務省勧業課長であった中村喜一郎である。

中村は明治六年、応用化学研究のためドイツに留学、同年ウィン万国博覧会でヨーロッパの染色技術に驚嘆し、自ら希望して染色伝習生となった。彼はストックホルムのアニリン工場などで一年間、洋式染法を研究し帰国している。当時わが国に輸入されていた化学染料は、マゼンダ（紅粉）ヴァイオレット（紫粉）など数種にすぎなかったが、中村は新たに三七種のアニリン染料を持ち帰り、染殿でその使用法を講義している。

だがせっかく中村の伝えた洋式染法も、当時は理解されにくく、しかもわが国の織物需要にマッチした染色技術に昇華されなかった。

そこで中村は古来からの染色法を研究する必要性を痛感し、農商務省の許可を得て、毎日一職工として、わが国の伝統的染法の習得に務めた。ほぼ一年におよぶ研究ののち、彼は洋式染色法とわが国古来の染色法の技術的接点を解明し、アニリン染料を用いて、国内の織物需要を喚起するに足る染色技術を確立している。

西陣を始め全国の機業地に、化学染料の正しい使用法がゆきわたるためには、その後およそ十年の試行錯誤の期間を要した。だがその基礎は中村喜一郎によって確立されたといってよい。

（福本武久）